
明日に備えて

泉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日に備えて

【Nコード】

N9420B

【作者名】

泉子

【あらすじ】

「いざって時に何が出来るかが大切」と叔母は言った。そして今、有の目の前には叔母と同じことを言った少年がいる。

プロローグ

「いざって時に何が出来るかが大切なの」と生命保険の勧誘員をしていた叔母は、私と会うたびにそう言っていた。

つまりは「頼りにしてる人物が実際に役に立つかどうかはわからない」と言いたかったのだろう。それは父にぴったりと当てはまる言葉だったのだ。

叔母は父の妹であるけど母の味方だった。中学・高校時代の同級生で親友だったからだ。高校卒業後の進路は別々で母は大学に入学し、叔母は就職してその後は仕事の都合で今の住居に引っ越した。母は大学在学中に父と出会い、恋に落ちた。父の妹が親友だと知ったのは親族への挨拶のときらしい。

小姑が親友ということに喜んだ母だが、叔母の住居へは車も結構時間がかかるらしく、あまり会いに行くことは出来なかった。私も今まで18年生きてきて、叔母と会ったのは20回ほどだった。

母が死んだのは私が15歳の夏だった。そのとき私は友人宅でお泊りパーティーをしていて、父とは母は二人きりで海に行っていた。簡潔に言うと母は溺れて死んだ。私は二人とはまったく別の所にいたため、すべてを知っている訳ではないけど一部始終は後で父から聞いた。

父とは母は人通りの少ない広々とした砂浜で、のびのびとビーチバレーをしていたそうだ。いい年してよくやると私は思ったが、黙っておいた。しばらくして、ボールが海の中に入ってしまったらしい。母が海にボールを取りに行った。そのとき丁度、高い波が押し寄せてくるところだった。小柄な母は波にさらわれた。

父は泳ぎが出来なかった。だから母がボールを取りに行ったほどだ。助けたくても、どうすることも出来なくて、父はとにかく走っ

て救助の人を呼びに行つた。

海から引き上げられた母はすでに息をしていなかったそうだ。そのことを聞いた叔母は怒つた。親友を失つた悲しみもあつて、父のことを責めた。自分の妻が溺れているのに、何で海に飛び込もうとしなかつた、たとえ泳げなくても人間は窮地に立たされたときこそ本領を発揮するのにと。

叔母はいざと言うときに役に立たない人間を酷く軽蔑していた。

叔母の言つたことは理解できる。母は死ぬとき、とても辛かつただろう。だつて頼りにしてた夫は助けに来てくれないのだから。

でも私は父のことを叔母のように恨んでいるのかといつたら、そうではなかつた。父は父なりの葛藤が自分の心の中であつたはずだし、まったく泳げない自分が助けに行つたら最悪、二人して娘の私を置いて溺死してしまふかもしれないと思つたと、後になつて私に話してくれた。その言葉が本心なのか、それとも弱い自分を正当化するための取つてつけた言い訳なのかは、私にはわからないけれど父が悪い人ではないと言うことは私自身が知つていた。

さて、何故私が通常なら避けて通りたはずの出来事を思い出したのかと言うと、今私の目の前にいる人物によつて、その思い出が連鎖的に浮かんできたからである。

君は今私にこう言つたよね

「いざつて時に何が出来るかが大切なんだ」と。

第1話

「現在午後5時46分！ターゲットの行動に変わったところはありません、隊長！」そんな声が閑静な住宅街に響く。都市から近いにも関わらずこの地域には敷地面積のやたら広くて豪華な家が立ち並び。ずっしりとした門扉、そしてこの住民たちは大抵、血統書付きのドーベルマンか何かを番犬として飼っていたりする。つまりここに住む人たちはお金持ちなのである。

松島有は、手元の写真を見る。写真にはふわふわくるくるとした髪型の愛らしい美少女がにっこりと微笑んでいる。写真に写っている彼女の名前は河崎美並。有と有の幼馴染である小池竜太の、今回の仕事のターゲットだ。

竜太は、通う学校の生徒から依頼を引き受けて何でも屋もどきを開いている。なぜかというとな竜太は親から小遣いを貰っているものの金遣いが荒いのですぐにお金がなくなるからだ。貰ってから3日でお金が消えてしまうので、常時金欠状態だといえる。竜太の両親は『太郎のパン屋』などというふざけた名前のパン屋を経営していて、その店が割りと賑わっていて忙しい。だから竜太はパン屋の手伝いをしていてバイトが出来ない。なので気軽にこなせる依頼だけに対応し、何でも屋もどきでお金をちまちまと稼いでいる訳だ。

「有、この軍隊口調ごっこやめにしない？疲れるんだけど。てか、そもそも何で有が隊長なんだよ！勝手について来たくせに！」双眼鏡を手に持った竜太が堪え切れないといった顔で叫ぶ。有と竜太はターゲットが帰宅するところを尾行していた。

「小池隊員、黙りたまえ！勝手に私がついて来ただと？お前みたいな野郎が一人で美少女の後をこそそつけていたりしたら、お巡りさんに職質されるのがオチだろうがよお！私がいるおかげで今迄怪しまれずに済んだんだ！むしろ感謝してほしいね。だから私が隊

長だ！」乱暴な口調で言い捨てられ、竜太は啞然とする。

有は見た目こそしっかりしているまともな人に見えるが、中身はグダグダだ。竜太に対しては、『わがまま』と『適当』を足して2で割った様な態度で接する。そもそも軍隊といいながら、二人とも軍隊の階級なんて『隊長』と『隊員』があるということぐらいしか分からない。適当だ。

「もういい。軍隊口調はやめね。とにかく3Bの小沢からの依頼『河崎美並に怪しいところがないか探ってくれ』っていうやつ、金に釣られて引き受けるんじゃないか。美並ちゃん全然怪しいところがない。迷子の女の子のお母さん探してあげたり、むしろいい人だし。」竜太が冴えない感じで呟く。

「もうさあ、適当でいいじゃない。捏造しちやえば？『河崎美並は不良っぽい男と付き合っています』とかなんとか。もしくは、ミスター・眼鏡に言えば？『この仕事は出来ませんでした』って」さっきの言葉を聞いた有が、さも他人事だともいう風に言う。ついでにいうと、ミスター・眼鏡とは仕事を依頼した小沢雅人のことだ。小沢は顔良し、頭良し、加えて眼鏡という乙女ゲームのキャラクタ―みたいな容姿をしている。凡人には近寄り難いオーラを纏っていて、みんな会話の中で彼を指すときは遠巻きにミスター・眼鏡と呼ぶ。

「駄目！俺は請け負った依頼はしつかりこなすし、結果も捏造しない！金貰ってるんだから精一杯、誠意を尽くしてやるんだよ！」竜太が憤慨して叫ぶ。これだけは譲れない、竜太のポリシーだ。

「分かったよ、もー。竜太は変なところで真面目で誠実なんだからあ。学校の課題とかは隣の席の中島から丸写しするくせに。まあそれは置いといて、河崎美並について判ったことは彼女がお金持ちの家の娘さんっていうことくらいだね。あとは根っからのお人よして事くらいか。それよりさ、あれに気がついてる？竜太」

有がそう言っ指で指したのは、美並の家と思われる豪邸の門の

前に立っている黒づくめの男だった。有の視力は低いので、若い男もしくは中年男性かが分からない。分かるのは男の身長が結構高いということだ。背筋がきちんと伸びているのでお年寄りとは考えにくい。男だと判断したのは、けして太ってないながらもがっしりとしたシルエツトで女性的な感じがしないからであつた。

「うわっ、何あいつスツゲー怪しいんだけど。今気がついた。てか不審者？」竜太が眉を顰めて言う。今まで大きな声で会話していたが、怪しい男に気がつくとも無意識に声が小さくなつてしまう。

「男は若い？それとも中年？」有が竜太に尋ねる。竜太はゲーム・パソコン類を一切しないためか、同年代の男子高校生と比べると格段に目が良い。有と竜太がいるところから、美並の家の門は50メートルほど離れているが竜太になれば見えることだろう。

「あー…若い男だ。というよりあいつが着てる黒い服って学生服だぞ。てか、うちの学校の生徒だよ！」竜太は男を指差して思わず大きな声を出してしまう。

「竜太、静かに！河崎美並がもうすぐ家に着きそうだよ！あつ、男が何か向こうに行っちゃつた。美並は男に気がついてないみたい」美並が男に気がついていないのは男は美並から死角の所に立っていたからだろう。美並が家の前に来ると、男はサツとその場を離れてしまった。

美並が完全に家の中に入ってから1分ぐらい経つただろうか。すると男がまたさっきの場所に現れた。男はしばらく美並の家をじつと見つめていた。かと思うと、おもむろに美並の家に背を向けて歩き出した。多分、この場から撤収するのだろう。

「怪しい、怪しい、怪しい！あの男、うちの学校の生徒なんですよ？もしかして河崎美並のことが好きで好きで、ストーカーしてるのかも。じゃないと本人に隠れて家の前まで来る理由が分からない！」有が、女の敵！とでも言うつように男の背中を睨みつけて言う。

「まあまあ。なにもそうと決まつた訳じゃないし。」竜太が有を宥

めるようにして言う。

「バカ！何かあってからじゃ遅いんだから！犯罪の匂いがするよ！私、ちょっとあの男に話しかけてくるね！」そういうと有は男の方に駆け出してしまった。竜太は止めようとしたがもう手遅れだ。昔から有は、確固たる証拠もないのに無理やりに決め付けては突っ走っていた。竜太はそのたびに有の尻拭いをやらされるのだ。今回もそうだろう。

第1話（後書き）

ジャンルを「文学」から「その他」に変更しました。

第2話

有は謎の男の背中を追って軽く走った。10秒も走ると男に後一步というところに追いつけた。有は一旦息を整えるため、そして男に声をかける前に心を落ち着かせるために深呼吸をした。はあつ、と息を吐くと河崎美並の尾行をしている間に噛んでいたレモン・ガムの香りがした。

「ねえ、ちよつといいかな？」有は平静を装い、それでいて顔にはいかにも『自分は無害ですよ』ととてもいう様な表情を貼り付ける。これで『ちよつと道を尋ねる女子高生』にも見えないことはないだろう。

「何？」振り返った男が言う。男の容姿は一言で言うところ『かつこいい』だった。ネチネチした粘着質の顔を想像していた有はこれには面食らった。この男の顔のレベルで言うところの子には困らないはずだ。ストーカーをするような風には見えない。いや、もしかして告白してるのに断られ続けた結果、ストーカーに至ってしまったということも考えられる。

とにかく、河崎美並の家の前で何をしていたかを聞きだそうと有は口を開いた。

「あの、河崎さんのお宅ってどちらでしょうか？ちよつと迷ってしまつて…」有は嘘をついた。本来嘘をつくのは何となく躊躇われる有だが、この場合は仕方がない。これで多分美並の友達だろうと思われたはずだ。次の言葉を言おうと思いい口を開いたが、それは竜太が有の名前を呼ぶ声でかき消された。

「有！お前何かしでかしてないだろうなあ！？」気がつくと竜太は有の真後ろにいた。いつの間。そう思った次の瞬間、竜太は有の頭をガシツと鷲掴みにすると、それをグツと下に下げた。丁度頭を

下げさせられている格好になる。

「すいません！こいつ、何か失礼なことしませんでしたか？」竜太も頭を下げて言った。有は竜太なんか「こいつ」呼びわりされたことが気に食わなかったし、何より竜太に頭を無理やり下げさせられているこの屈辱的な格好に耐えられなかった。有は自分の全体重をかけて竜太の足を踏んだ。竜太はヒツと言う声を漏らしたが、それを顔には出さなかった。

「ははっ…。あ、いや。えっとその子は何にもしてないです。ただ場所を尋ねてきただけで。」男が言った。それでやっと竜太の手が有の頭から離れた。きつと竜太は有の様子が気になって来てくれたのだろうが、むかついたので後でシメようと有は思った。というか、あの男さつき笑ったような。さっきの一連の出来事を見ていたのだろう。竜太に『こいつ』呼びわりされるのも腹立つが、怪しい男に笑われるのも腹立つな。

でも竜太は男の言葉に安心したようであからさまに、ほっと胸を撫で下ろしていた。男は男子高校生にしては初対面の人への言葉遣いが丁寧だった。きちんと躡られているのだろう。いきなり知らない人から声をかけられたら『おまえ、何だよ』と乱暴に言ってしまうってもおかしくない。竜太は男のことをむしろ悪い人じゃないと思っただろう。女の敵かも知れないのに。

「そうですか！それなら良かった！」竜太がヘラツと笑って言った。竜太のこの笑顔は人を脱力させる効力をもつ。いわゆる竜太の必殺技だ。この笑顔を見ると大抵の人は警戒心を解く。竜太は人懐っこい人柄とこの笑顔のおかげで、クラス替えなどのときはすぐに友達が出来ていた。もちろん、この怪しい男も高校生で、竜太と年が近いだろうからこの必殺技は有効だ。

やはり、効果は怪しい男にもあったようで、最初に僅かながらもあった警戒心がまるで感じられなくなった。まさか、竜太はここまです計算してやって来たのだろうか。と思ったがそれはないだろう。何しろ竜太は年中ぼけっとしている奴だ。「河崎さんの家を探し

てるってことは、同じくらいの年だし美並に用があるんですか？あいつの家ならそこですよ」怪しい男が竜太から有に視線を移して言った。あいつ、と怪しい男は美並のことをよんだ。あいつというその言葉には、嫌な感じがしなくて、親しい人間を指している感じのニュアンスが含まれていた。ということは、男は美並のストーカーではないということか。

竜太の顔を見ると、ぼかんとした顔をしていた。河崎美並とは親しい知り合いらしい口調に、ビックリしたのだろう。同時に、本当のストーカーに関わるという面倒な出来事に巻き込まれなくて良かったとも思っているに違いない。

「へえ、河崎美並の知り合いなんですか。俺はてつきりストーカーかなあと思っちゃって、びびっちゃったんですけど」と竜太がボソツと呟いた。次の瞬間、空気が凍った。

竜太のばか、と有は心の中で毒づく。きつと竜太のことだから、頭で考えた言葉が無意識のうちにポロツと口から出てしまったのだろう。

「え、俺のこと美並のストーカーだと思っただんですか！というか見られてたことに気がつかなかった。念のため言っておくと、俺は美並の従兄妹です」男が言った。ストーカー呼ばわりされたのにもかかわらず、怒る風ではなかった。むしろ、その発想には面白がっているようでわははと笑っている。おおらかな性格のようだ。

言いだしつぺなくせに、男の外見を見た瞬間から男に対する『ストーカー』というイメージがすでに消えつつあった有は、よく考えたらとても失礼なことを言ったのに怒らないでおおらかに笑ってる男の人柄に興味がそそられていた。

竜太の発言で凍りついた空気は、男の優しい言葉でもう完全に溶けていた。

「あー…失礼しました。傍から見たら、すっごく怪しい人だったので気になって。最近は何騒なことが多いじゃないですか。ところで、その制服私たちと同じ学校ですね？」竜太の代わり、謝罪の言葉を

有は言った。ついでに男の個人情報にもさりげなくさぐりを入れてみた。この男、美並と親しいようだし何か情報が得られるかもしれない。有と竜太は制服を着ているので変に警戒されることもない。もともと、有と竜太の目的は小沢からの依頼をこなすことだから、南の知り合いであるこの男と親しくしておいて損なことはない。

「ええ、まあ。二年の岸本です」岸本が言った。有はこの名前に聞き覚えがないかと頭をめぐらした。

「竹内が言ってた、誠実そうなかっこのいい男のことじゃないか？」竜太が有に小声で言った。竹内は有と竜太のクラスの女子で姉御肌で皆に好かれており人望もあるが、男運は最悪に悪かった。1ヶ月前、彼氏が3股をかけていたことが発覚し別れたのだった。それから彼女は、今度は誠実そうな人と付き合うんだ、とたびたび有に愚痴をこぼしていた。そして彼女から、誠実そうでかっこのいい人が2年生にいる、ということを少し前に聞いていた。

「ああ、あの。」有がなるほど、といった風に呟いた。

第3話

「俺は3年の小池。で、こっちが松島有。岸本って呼んでいい？ところで、河崎さんのお家で何してたの？」竜太が自分と有の紹介をした。岸本が年下だと分かって口調がいくらかくだけたものとなった。

「あ、いいですよ。それと、美並の家の前でやってたことですか？これ言っちゃっていいのかなあ。ま、いいか」岸本は一瞬躊躇って考えたようだか、自己完結をしたようで話してくれるようだった。さつき知り合った人に身元ははつきりしているとはいえ、ここまで話していいのかと有は岸本の将来を少しだけ心配になった。

「弟に頼まれたんです。美並には高校生の婚約者がいるんですけど、俺の弟は美並のことが好きらしくて、その婚約者が美並に接触しようとしてきたら何とか邪魔してくれって。その婚約者とも一応知り合いなんです。幼馴染で」岸本が話す。その表情からは弟思いの兄そのもので、その声音からは協力してくれと訴えているようにも思えた。弟は高1で、体が丈夫では無いそうだ。ただの高校生たちがこの婚約者を邪魔するのは困難に思えた。高校生なのに婚約者がいるということは、親の意思も関係しているに違いない。いわば大人の事情であり、くちを突っ込むのはよくない面倒ごと^{ゴト}に発展する可能性もあるわけだった。

岸本の話の聞いていると有の頭に1つの仮説が浮かんだ。

「その婚約者って小沢っていう名前？」有が訊いた。岸本が目を丸くした。

「そうです。どうして知っているんですか」岸本が訊く。さりげなく竜太の方を見遣ると、ピンときた顔をしていた。

「実は俺たち、小沢雅人…多分その婚約者だと思っただけ、そ

いつに河崎美並について怪しいところが無いか調べてくれって頼まれたんだ」竜太がばらした。それから、今までに至る出来事を岸本に詳しく語った。

「ということは、向こうは向こうで何か企んでいるでしょうか」岸本が心配そうな顔つきで言った。そして、竜太と有の方を縋るような目で見つめ、

「何とかして、雅人から真意を聞き出せないですか？」と言った。

「いいよ、さりげなく訊いてみる。でも向こうの考えていることが俺たちに不利益になるものじゃなかったら、岸本たちのことを小沢に言ってもいいかな？俺、小沢から依頼を受けているわけだから早く解決してしまいたいんだよね」竜太が小沢に言った。有と竜太にしても調査が行き詰っていたので、これで終止符を打ってしまうのに絶好のチャンスだった。

「人つていざという時に何が出来るかが大事ですね」岸本が切なげに呟いた。

その翌日、竜太と有は小沢から河崎美並を調べている目的を聞き出すために特進クラスの教室に向かった。有は岸本が昨日別れ際に自嘲気味に呟いた言葉が気になっていた。母の出来事が思い出されて胸がむかむかした。そのこともあって今日の有はなんとなく投げやりな気分になっていた。

長い廊下を歩き特進クラスの扉の前に来ると、有は乱暴に扉を開けた。隣で竜太がぎよっとした顔をしていた。小沢はいないかと呼びかけるとすぐに本人がやってきた。3人は教室の入り口付近に溜まってしばらく当たり障りの無い会話をしてから本題に移った。

「あんた、河崎美並の婚約者らしいじゃない。なんで竜太に彼女のことを調べさせてるの？」有が言った。小沢は攻撃的な物言いに多少驚いていた。竜太は有の直球的な発言に咎めるような視線を送った。

「有、もっと慎重にしろよ。逆に話さなくなるかもしれない」竜

太が抑えた声で有に言った。いつに無く攻撃的な有の様子に戸惑っているようだ。

「いいよ、そこまで知ってるんだったら。調べろって依頼したんだから、知られて当然と言える。」小沢がけろりとして言った。むしろ、半分冗談で依頼したのに案外役に立つな、と感心してる様子だった。

「好きな人がいるんだ」小沢がいくらか照れくさそうに言った。

「だから美並とは結婚しない。美並に男でもいれば、取りやめにするきっかけにでもなると思ったから小池に頼んだ。以上」小沢が早口で言った。

それから少しの沈黙があった。

「なんだ、問題解決だ」竜太が拍子抜けした様子で言った。

岸本によると、岸本の弟と河崎美並はお互いに両思いらしい。二人ともお互いの気持ちは知らないが、岸本にたびたび相談していた。そのことを小沢に伝えると、二人を知っている小沢は「やっぱり」とうれしそうに言った。

「それじゃあ、どうする？」有が誰に尋ねるでもなく訊いた。有もすっかり毒気を抜かれたようだった。

最終話

「あのー、1つ質問です」竜太が手を挙げて小沢に質問した。

「河崎美並と小沢の婚約は、政略結婚のため？」竜太が訊いた。もつともな質問で、その場合は婚約解消は難しいかもしれない、と有は思った。

「いや、違う。もともと俺の父と美並の親父さんは大親友だったんだ。若い頃二人は、お互いの子供たちを結婚させよう、と冗談半分で約束した。それから俺の父は過労で倒れてすぐに亡くなった。俺が10歳のときだった。不憫に思った美並の親父さんが俺たち家族を何かと気にかけてくれるようになった。美並の親父さんはかつて親友と交わした約束を実現させようと心に決めた。で、今に至るという訳だ」小沢が簡潔に説明してくれた。

有は親友が亡くなった、ということを知ったら今度は叔母のことが思い出された。岸本に関わってから母の出来事がしょっちゅう頭に浮かんでくる、と有は思った。

「それじゃあ、お金とか権力とかドロドロしたそんなものではなく、親友との約束という気持ちの問題だね。でもこれはこれで厄介だ。」竜太が言った。

「いとこ同士って、結婚できたっけ？」竜太が訊く。

「知らない。でも恋愛は自由だわ」有が言った。

「さあ、ここからはあの2人の問題だ。小池、松島ご苦労様。御礼は後日必ず。とりあえず今はもうすぐ昼休みが終わるから。」小沢が言った。それじゃあ、と挨拶を交わして有と竜太は教室に戻り、解散となった。

放課後、有と竜太が岸本と出会った河崎美並の家の前に行く人影が2つあった。岸本はすでに来ていた。それに加わって河崎美並の姿があった。有と竜太は2人に合流した。河崎美並と軽く自己紹

介をして本題に入った。

小沢との会話の内容を簡潔にまとめたものを2人に話した。話を聞いた2人の表情はみるみるうちに不安そうな顔から、安心した顔へと変わっていった。

「お父さんは説得できそう？」有は美並に訊いた。

美並はこくつりと頷いた。河崎美並は近くで見るともつと美人だった。内気で口数が少ないようだったが性格はよさそうで、有と竜太は2人を全力で応援してあげたい気持ちになった。

「隆とは、一緒にいられるだけで幸せなのでまだ結婚とかは考えていません。でも雅人さんとの婚約は解消できると思います。前に父が、付き合ってる人はいないのか、と訊いてきましたから。あの様子だと、私が本気で好きな人がいることを伝えたら、解消を許してくれると思うんです。お2人とも、本当にありがとうございました」美並が丁寧でやさしい口調で言った。隆とは岸本の弟の名前らしい。御礼まで言われてしまって、ほとんど何にもしていないに等しい有と竜太は恐縮してしまった。

それから2日後、小沢から婚約を解消できたことを知らされた。美並の父親は、最初は渋ったが美並の熱意に負けて許したらしい。有は話を聞いている途中、岸本のことを思い出した。有は岸本のフルネームを知らなかったことに気がついた。小沢に訊けば分かるだろうが、有は放課後は暇だし自分で聞いてみようと思った。向こうが自分の名前を知っているのに自分が向こうの名前を知らないのは少し不公平だと感じた。

放課後、有は1人で河崎邸へ向かった。映画やドラマの展開でいくと彼に会えるはずだった。曲がり角を曲がって河崎邸が見えると門のところに入影が1つあった。岸本だった。

「会えると思った」有がお約束通りの展開に感心した様子で言った。

「俺のほうこそ。あの、今度一緒にどこかにいきませんか」岸本が頭をかきながら照れくさそうに言った。

「いいね。ところで名前を覚えてくれませんか」有はやわらかく微笑んで言った。

「ああ、そういえば言ってますでしたね。誠つていいいます」岸本も微笑んで言った。

誠実そうな人だな、と有はぼんやりと思った。ああ、竹内に何て言おう。

夕焼けのオレンジ色に照らされて、閑静な住宅街の道路のアスファルトには2人の背の高い影が映っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9420b/>

明日に備えて

2010年12月19日02時35分発行